

# 国語科

## I 漱石の作品をどう指導したらよいか

——「こころ」・「私の個人主義」を中心に——

米 山 誠

### 1. 漱石文学の読まれ方の実態と問題点

中学一年生の授業で「坊っちゃん」の教材を扱った時、①「漱石という人のことを知ったのはいつ頃か。知ったきっかけはなにか。」②「漱石の作品を読んだことがあったか。あったなら、それはなんという作品か。」などの簡単な調査をしてみたことがある。<sup>(1)</sup> その結果、①については、大半の生徒がすでに小学校3～4年生頃までに知ったということ、そして、そのきっかけとしては父母・兄弟など家族の読書や話題の影響によるものが最も多いということがわかった。なんとなく、自然に知ったという類の答も一割程度あった。②については、「はい」と答えた生徒が約80%もあることがわかった。ともあれ、以上の資料は、漱石が国民的な作家として、よく知られよく読まれていることを如実に示しているように思われる。

しかし、漱石のその知られ方・読まれ方には、かなり大きな問題があると思われるので、そのことについて述べてみたい。

先の調査②の「読んだ作品」としては、大部分の者が、「坊っちゃん」を、約半数の者が「吾輩は猫である」をあげていた。それ以外の作品ではごく少数の者が、「草枕」「こころ」「三四郎」をあげていた。しかし、読まれ方の実態は、作品全文を終りまで読み通したという者は、「坊っちゃん」の場合約半数であった。他の作品の場合は推して知るべしである。<sup>(2)</sup> 実は、このような読まれ方の実態は、高校生についても、大体似たことが言えそうである。高校二年生に対するアンケート<sup>(3)</sup>の結果によると、高二の「こころ」学習以前に漱石のなんらかの作品を読んだことのあった者は約90%で、そのうち、「坊っちゃん」を約80%の者が、「吾輩は猫である」を50%の者が読んでいた。この二作の他には「草枕」「三四郎」がそれぞれ約20%、「こころ」が6%と続く。しかし、作品全文を読み通した者の数については、「坊っちゃん」73%、「吾輩は猫である」44%であった。このような読まれ方から、どんな漱石像が生徒達の頭の中に描かれているのだろうか。これも、高二に対するアンケートの結果によると、「こころ」学習以前に生徒の描いていた漱石（又は漱石の作品）に対するイメージは、大体次のよ

うなものであった。大雑把に分類しながら並べてみよう。

「明るい」「おもしろい」「愉快だ」「のんびりしている」「軽く読める」「庶民的」「楽道家」「性格のさっぱりした人」「おもしろおかしく生きた人」「低俗な小説を書く人」「一途な正義漢」等の類が最も多く約半数がこれである。逆に、「すごくむづかしい」「とっつきにくい」「古めかしい」「明治時代の偉大な文豪」「庶民的な感じなど全然ない人」「名作家」等の類もかなり多い。「強い個性をもった人」「自己にきびしく生きた人」「実直で内面の深い人」「反骨精神のある、筋の通った教養人」「明治としては新しさのあった人」「物事を客観的にとらえる理論的な人」「社会風刺」「心理描写」「痛烈な批判精神」「ユーモアと深刻さの両面」等のようないわゆる近代日本文学の代表的作家としての漱石と結びつく類のものは3割程度であった。

こうしてみると、漱石は多くの日本人によって、しかも小学生時代から、名を知られ、作品を読まれてはいるが、実は、「坊っちゃん」「吾輩は猫である」の上っ面からだけの印象により漱石像がつくられ、それがそのまま固定化されやすい傾向があるといえよう。

次に、教科書における漱石の作品のとりあげ方についてみてみよう。私のみた教科書（中学用5種・高校用9種）では、すべていずれかの学年で一度は漱石の作品を載せている。<sup>(4)</sup> しかし、中学では「坊っちゃん」、高校では「こころ」が一番多く、作品の選び方にしても、部分の採り方にしても、方法がまったく型にはまった観がある。問題は、こうした一定の作品の、一定の部分だけの教材で、はたしてどれだけ漱石文学を生徒に理解させうるか、今後、日本人の多くに正しくうけつがれてゆくように指導できるかということである。中学や高校の国語科の学習指導、読書指導などの場で、貧弱な教材にできる限り豊かな肉付けをし、魅力に富む漱石の世界へ生徒の心をひきこんでゆく方法を工夫しなくてはならないと思う。上記のような問題点は漱石に限ったことではないともいえるが、漱石の場合特に虚像と実像との隔たりが大きいように思われてならないのである。

注(1) 名大附属中学校1年生(1学級)対象の無記名アンケート(46年1月実施)。

- (2) 読まれた作品の文章の中には、原文のままではなく、幼少年向きに書き換えられたり、抜粋されたものがあることも考慮に入れなくてはならない。(その点については調査が及ばなかった。)
- (3) 名大附属高校2年生(3学級)対象の無記名アンケート(48年3月実施)。
- (4) ○「中学国語」—「坊っちゃん」(日書1.東書1.教出1),「吾輩は猫である」(光村3),「夢十夜」(三省3)。○「高校現代国語」—「こころ」(筑摩2.尚学2.明治2.旺文3.第一3.),「それから」(角川2.東書2.教出3),「三四郎」(三省3),「私の個人主義」(東書1)。

## 2. 漱石文学指導の目標と経過(概要)

49年度の名大附属高校2年生(3学級)対象の現代国語において、漱石の作品を重点的に指導してみたいと考え、以下のような計画と実践を試みた。指導の目標・留意点および実践の経過を記しておきたい。

### (1) 指導の重点目標・留意点

- ① 作品そのものに即してしっかりと読ませることにより、漱石に対する固定観念を打破し、新しい目でその真価を発見させ、おもしろさを実感させる。
- ② 漱石が追求し苦悩した近代日本の特質や現代人の生き方などの問題について深く考えさせる。
- ③ 年間を通じて計画的に作品を読ませる機会を多く作り、読書指導としての効果をあげる。
- ④ 作品を読む場合、その作品全体を最後まで読み通すことを指導し、特に長編小説の効果的な教材化と指導方法とを工夫する。
- ⑤ グループによる研究や発表などを通して、生徒の主体的な学習活動を活発に展開させる。

### (2) 実践の経過

- ① 1学期の初めに、学習指導の年間予定を簡単に生徒に伝え、2学期後半に「こころ」ととりくむ旨を予告し、あらかじめ「こころ」を初め、漱石の作品を数多く読むことを奨励した。一つの方法として、「漱石作品集」(岩波文庫のセット)を研究費で購入し、各教室に備え、図書委員の管理により自由に利用させることを試みた。<sup>(1)</sup>
- ② 夏休みに「こころ」(全文)を通読して感想文を書くことを宿題とし、漱石の他の作品も自発的に読んでおくことを奨励した。
- ③ 2学期後半に「こころ」(全文)の学習指導実施。(10時間配当)
- ④ 冬休みに「こころ」と関連させて「私の個人主義」(教材配布)を読んでおくことを宿題とし、さ

らに「それから」を自発的に読むことを特に奨励。

⑤ 3学期の初め、「私の個人主義」(全文)の学習指導実施(3時間配当)。

⑥ 学年末に、49年度の現代国語学習に対する感想と同時に、漱石の作品の学習に対する感想をまとめるために、生徒全員対象のアンケートを実施。

注(1)「漱石作品集」利用の実態 —— 49年7月から50年3月までの利用者の延人数は75名。読まれた作品と利用者数は次のようである。「こころ」(8),「三四郎」(8),「それから」(7),「草枕」(7),「行人」(7),「吾輩は猫である」(6),「門」(6),「彼岸過迄」(6),「硝子戸の中」(6),「明暗」(5),「虞美人草」(4),「坊っちゃん」(1)。

## 3. 「こころ」および「私の個人主義」の学習指導

### (1) 教材の問題

① 教材選定の理由—「こころ」については漱石後期の思想の結晶ともいえるもので、近代的自我の矛盾をきびしく追求し、人間の生き方について深く考えさせる作品であること、文章表現の上からも、構想や心理描写などにおいて卓越した作品であること等である。また、「私の個人主義」については、「こころ」脱稿4カ月後の講演内容であり、漱石が自分の過去の体験を踏まえて、近代個人主義思想の根本を懇切に述べており、今日にもそのまま訴えるものをもっていること、「こころ」の学習をさらに発展させるのに適していると考えられること等である。

② 教材のテキスト—「こころ」は教科書(筑摩)には作品全体の約 $\frac{1}{10}$ (「下」の後半抜粋)が載っているだけなので、生徒各自に、文庫本など用意させ、「私の個人主義」は教師が本文をコピーして用意し、生徒に配布した。<sup>(1)</sup>

注(1) 吉田精一「近代文学注釈大系 夏目漱石」(有精堂) P. 131 ~ P. 159

### (2) 「こころ」(全文)の学習指導(10時間)

① 導入として夏休み宿題の感想文に対する批評や年譜(資料配布)による漱石の生涯についての説明等を行なった。

② 学習の進め方としては、教師の解説によって結論に導くようなことを避け、グループ活動の形で生徒達自身により、さまざまな角度から問題点を見つけさせ、それについて話し合わせることを中心にした。なお、各グループの討議内容は簡単なメモ式のレポートにしてその都度提出させることにした。「上」「中」「下」の各巻ごとに、生徒達

により指摘され討議された問題点を以下に記す。

「上」(「先生と私」)での主な問題点

。「私」が、暗く固い感じの先生にひきつけられ、やがて遺書を託されるまでに発展するのはなぜか。不自然ではないのか。「何も仕事をしない「先生」の生き方はあれでよいのか。「私は淋しい人間です」(「上」-7)。「子供はいつまで経ってもできっこないよ」(「上」-8)。「恋は罪悪ですよ」(「上」-13)。「かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶か、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より淋しい未来の私を我慢する代りに淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。」(「上」-14)。「死病にかかりたい」(「上」-21)。「平生はみんな善人なんです。……それかいざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。」(「上」-28)等。これらの箇所がすべて「下」への伏線として深長な意味をもつことが指摘され、「下」の内容と対応させながら討議された。なお、そうした構成の見事さ、推理小説風のおもしろさも話題になった。

「中」(「両親と私」)での主な問題点

。「私」が何となく両親をさげすんでいるような態度をとるように感じられるが、なぜあんな態度をとるのか。「私」が重病の父を置いて「先生」の方へ急いでしまうのはなぜか。「明治天皇の死、乃木大将の殉死がなぜあれほどの大事件なのか。「おれが死んだら……」(「中」-10)ということばが強調されているのはなぜか。「明治人気質とは？」等。全体としてみると、「上」「中」ともに「下」のために存在するという構成が明確となり、以上のような問題点は「下」において再度検討することになるとして、「下」に進んだ。

「下」(「先生と遺書」)での主な問題点

「下」では、Kの死、先生の死の二点が大きな問題点となり、これをめぐって疑問や意見が続出した。提起された問題点は大小さまざまだが、全部で40項ほどになった。それらの中から主なものを選んで記してみたい。「Kの死」については、。「Kの遺書はそのまま受けとめてよいのか。「もっと早く死ぬべきだった」(「下」-48)という文句を先生がどう解釈したのか。「Kの死もエゴイズムではないのか、Kは自分の自殺が先生を苦

しめることになるとは考えなかったのか。「もしKが恋に突き進んでいたらどうなったのか」。「お嬢さんのKに対する気持はどうだったのか、心を寄せていたのか。」等の疑問点が出された。いろいろな意見が交わされた後、Kの自殺の理由として、①自己の信条と現実との矛盾による自己への絶望。②親友に裏切られたことによる人間不信、孤独感、寂しさ。③親友を悩ませ、親友に卑怯な態度をとらせる結果になったことに対する責任、等の意見が大勢を占めてはぼ落ちついた。「先生の自殺」については、。「先生はKの死後ながく生きていて、あの時点で死んだのはなぜか」。「明治天皇の死、乃木大将の殉死がどうして先生の死のきっかけになりうるのか」。「もし天皇や大将の死がなければ先生は自殺しなかつたらうか」。「K自殺後の先生の生き方は無意味ではないだろうか」。「先生は後に残る奥さんの事をどう考えていたのか」。「死んだ気で生きていこう」(「下」-55)とはどんな意味だったのか。「先生はなぜ「私」にうちあけ、奥さんにうちあけなかつたのか」。「Kをだしぬいたことは人間として自然なことなのか、不自然なことなのか」等の疑問点が出され、活発に論議された。その結果、大体、①Kを裏切り、自殺に追いこんだという罪の意識、良心の苛責。②自己不信・人間不信の絶望感、孤独感。③近代社会のエゴイズムに対する絶望、等の意見にまともではきたが、どうしてもすっきりとした理解やまとめには至らなかつた。「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がする」(「下」-56)、「明治の精神に殉死する」(「下」-56)ということばの中の「明治の精神」とはなにか、そしてそれは、さきに出された「自由と独立と己れとに充ちた現代」(「上」-14)とどんな関係があるのか、等が最大の難問となった。明治の精神が先生の自殺にどう結びついているのかがつかみとれないのである。

Kの死、先生の死以外に問題となったこととしては、。「登場人物になぜ名前を与えなかつたのか、「お静」「お光」だけ名前が出てくるのはなぜか」。「Kの告白から死ぬまでの場面に「ふすま」の描写が幾度か出てくるが、なにか深い意味があるのか」等である。

③「こころ」学習の最終時間に、越智治雄氏のNHKラジオでの「こころ」に関する解説<sup>(1)</sup>の録音を教材として生徒に聴かせた。作品について表現の細かい点まで行き届いた解説で、生徒達の疑問点を考えるためのヒントを与えられたり、また漱石の作品の読み方、とくに図式化しない読み

方の注意を与えられたりして有意義であった。

注 (1) NHK第2放送 49. 12. 22 (8.00 ~ 9.00 A. M.) 市民大学講座「漱石、人と作品第4回『ところ』」

④「ところ」についての生徒の感想文から ——  
 「単に衝撃的というだけでなく、わたし自身が裁かれているような気にもなる。友情と恋愛との間で選択を迫られた場合、わたしならどうするだろうか……」(女)。「現実味があり、自分達の生活と比較できるような内容だと思う。心理描写も驚くほどで、現代人の本当に考えそうなことを容赦なく、心の奥底まであばいてぼく達に迫ってくるようだ。……「ふすま」は大きな意味をもつ。室が人間の心の中で、「ふすま」がその心の戸のように思える。現代になるにつれて、「ふすま」が重くなって、なかなか開けることができなくなる。心の中をうちあけようと「ふすま」を少し開けるが、それ以上開けることができない。このように「ふすま」は現代の心の戸のようだ。……先生が事件以来、死んだように生き、最後には自殺してしまうことについては、それもエゴイズムのような気がする。いくら悩み苦しんだって、Kが生き返るわけではないし、自殺したってなんの解決にもならないからだ。……今度は自分を犠牲にして、人のために働くとかなんとかできるはずだと思う。」(男)。「読めば読むほどわからなくなる。問題点が多いので一つにしばらくすることにする。一番理解に苦しんだ点は、なぜ先生が自殺したかということだ。もし、ぼくがあのような立場に立たされたとしたらどうだったろうか。多分自殺はしないだろうし、先生ほど悩みもしなかっただろう。Kを直接殺したわけでもないのだから、思い悩む必要はないのだ。」(男)。「実験小説的で、登場人物がりっぱすぎる。人間臭さが感じられない。愛人のことで友を出しぬく、こんなことは、むしろ人間なら当たり前と思われて仕方がない。」(男)。「エゴイズム — 人間社会全体が、この汚いエゴイズムから成り立っているのではないか。皆、各自で勝手なことを言って、誰が傷つこうが自分の知ったことではない、そんな世の中がわたしはきらいだ。でも、人間からエゴイズムをとったら後に何が残るか。わたしはエゴイズムを片面では否定し、片面では肯定している。これは矛盾だ。結局、人間に生まれた以上、最後までエゴイズムはついてまわるのだ。」(女)

⑤アンケート「『ところ』を読んでどう感じたか」の結果(生徒数127名)から ——

⑦「非常によかった」(52名) ①「ある程度よか

った」(60名) ②「つまらなかった」(9名)④「わからない」(6名) <⑦・①の主な理由> 「人物の心理描写の見事さ」。「人間の真の姿を描いている」。「人間の心、愛などについて考えさせられた」。「他人の心を読みとり、他人の立場になって考えること、そして真の意味で人を愛することの難しさを感じた」。「こんなにも罪というもの、人間というものを追求した作品は初めてなので印象が強かった」。「今まで小説というものは簡単に読み流していたが、これを機会に深く考えをめぐらしていくことをおぼえた」等。

<②・③の主な理由>。「じめじめしてじれったい」。「暗すぎておもしろくない」。「作品で追求しているものが最後にわからなくなってしまった」等。

### (3) 「私の個人主義」(全文)の学習指導(3時間)

①原文のほとんど全体を教材として生徒に配布し、生徒に指名読みさせ、論旨を正しくとらえさせながら学習を進めた。とくに「ところ」で追求されていたエゴイズムの問題と、ここで強調されている「自己本位」「個人主義」の思想と比較してどう相違するのかを中心によく考えさせるようにした。そして、個人主義が当時の国家主義の中にあつて、一種の危険思想であったこと、それを敢えて支配階級の子弟たちの学校で漱石が強調したことの意義について説明した。漱石の反権力、反金力の姿勢は、とくに最近の日本の政界、財界の動きとも関連して、生徒に共感を呼んだようである。また、生彩に富んだ漱石独特の話術のおもしろさが親しみを感じさせたようにも思う。

②「私の個人主義」についての生徒の感想文から ——  
 「個人主義とエゴイズムは矛盾しているようで矛盾していない。つまり人間はエゴイズムを完全に脱することはおそらく不可能でしょう。しかし、その自己をしっかりと踏まえた上で、自分の納得がいくように生きていくことが大事なのではないでしょうか。他人との利害関係を伴っている時には互いにその立場に立って考えてみる必要があるのではないか。自己の欲求と他人への思いやりの矛盾を漱石は考えてほしかったのではないかと思う。」(女)。「エゴイズムの克服なんてあまりにもしんどい。エゴイズムは克服しきれものではない。ニヒリズムに逃げる方がよほど楽だ。——このような考え方で我々は現状から逃げているのではないだろうか。エゴイズムに対し、真向から立ち向かった漱石は我々よりずっと勇気のある人であるにちがいない。今、我々は本当に今のままでいいのだろうか。いや、いいわけがない。今、

我々は戦前に比べて全く自由な立場にありながら、なにをしようともせず、立ち止まり、エゴイズムの毒に冒されきっている。」(男)。「時代が時代だったせいか、個人主義についてあいまいに言っている気がする。自由と義務について力説して、個人主義は国家主義と対立しないと言っているが、なんだか自由という言葉に義務という言葉をかませせてごまかしているような気がする」(男)

③ アンケート「『私の個人主義』を読んでどう感じたか」の結果(生徒数127名)から――

⑦「非常によかった」(29名) ④「ある程度よかった」(65名) ②「つまらなかった」(19名) ⑤「わからない」(14名)

〈⑦・④の主な理由〉。「現代人の進むべき道につながると思うから」。「自主性、主体性確立の問題として共鳴」。「国家と個人との関係についての考え方に共鳴」。「個人主義と利己主義との区別を教えられた」。「利己主義、とくに金力、権力をきらう点に同感」。「実際にちょうど今、私が自分の道を見つけるのに悩んでいるので、“自己本位”の考え方が参考になった」。「個人主義についてもやややっていた自分の考えが少しまとめられた気がする」。「話がおもしろくて親しみやすかった」等。

〈②・⑤の主な理由〉。「ことばや言いまわしが古くてとっつきにくい」。「小説ほど興味をもてない」。「個人主義に固執しすぎている感じ」等。

#### 4. 学習後の生徒の意識

「こころ」・「私の個人主義」を中心とした学習指導を通して最初に掲げた重点目標がはたしてどれほど達せられたのであろうか。指導の反省資料を得るために、49年度高二「現代国語」の指導を終えた時点(50.3.19)で、生徒全員(127名)に対して行なったアンケートの結果をみることにしたい。

(1) 「漱石の作品を読んでむつかしいと思うか。どんな点がむつかしいのか」

⑦「非常にむつかしい」(13名) ④「かなりむつかしい」(69名) ②「むつかしくはない」(28名) ⑤「わからない」(17名)

〈むつかしいと思う点〉。「表面的なことではなく、根本の内容のつかみ方、作者の本当に言いたいことの読みとり方」。「なんでもないようなことばの裏にある真意を読みとること」。「疑問点を追求して、読めば読むほどわからなくなり、結局はっきりした結論が出ない」。「時代背景などを考えなければならない」。「表現のことば、漢字、熟語等が読みにくい」。「非現実的で好みに

合わない」。「時代的年代的ギャップ」等。

(2) 「『こころ』の学習をきっかけにして、自発的に漱石の他の作品を読んだか」

⑦「読んだ」(67名) ④「読まない」(60名)

〈読まれた作品とそれを読んだ人数〉「それから」(36)、「三四郎」(17)、「門」(11)、「明暗」(6)、「行人」(6)、「彼岸過迄」(5)、「草枕」(5)、「道草」(5)、「坊っちゃん」(4)、「虞美人草」(4)、「硝子戸の中」(3)、「吾輩は猫である」(3)、「二百十日」(1)、「文鳥」(1)、「夢十夜」(1)、「倫敦塔」(各1)以上。

(3) 「『こころ』『私の個人主義』の学習やその他の作品を読むことによって、漱石(人物又は作品)に対するイメージが変わったか。変わったとしたら、どのように変わったか」

⑦「変わった」(86名) ④「変わらない」(16名)

②「わからない」(25名)

〈どのように変わったのか〉

。「『坊っちゃん』はおもしろかったなあという程度であったが、人間のエゴを執拗なまでにつつまていく姿に心をうたれた。また、とても寂しい人なんだと思った」。「ユーモア作家としてのみ考えていたが、ユーモアの陰に隠された暗く寂しい心、孤独な心を知った」。「もっと軽く読むものと思っていたが、深い洞察力を持ち、真剣にその時代の問題を考えていたことを知り認識が改まった」。「無鉄砲なイメージから繊細なイメージに変わった」。「おもしろおかしく生きた人物のイメージから、人生を深刻に追求し、人間を見る目のきびしい人物のイメージへ」。「楽天的な作家だと思っていたが、人間の生き方について悩みに悩む苦勞人だということを初めて知った」。「一見皮肉っぽく社会を冷たく見ている人だと思っていたが、本当はこの社会のことを心配しており、しっかりした意見を持っている人だということがわかった」。「“猫”などにみえるようなインテリ階級の人、のんびりした学者タイプの人と感じていたが、非常に人間くさい悩みを持っていた人だということを知った」。「近代日本文学を代表する偉い作家としてとっつきにくかったが、自分と身近な人のような気になってきた」。「古くさい明治の文豪のイメージから、古くて新しく、伝統的でもあり、近代的でもある作家のイメージへ」等。

(4) 「漱石の作品を学習した時の授業方法に対する率直な感想や意見を書きなさい」

。「ていぬいな読み方を教えられ、理解が深められた」。「一つの作品を深く追求できたのはよかった」。「一人の作家を徹底的にやったのはよか

った。時間はかかったが印象づけられた」。「一つの作品を全部読むことが不可欠だと感じた」。「長編小説の学習にはよい方法だと思った」。「『私の個人主義』をやったので『こころ』の理解や漱石への関心が深められた」。「漱石の作品、『それから』など他の作品もさらにとりあげてほしかった」。「グループ学習によってみんなの意見交換がききやすい参考になった」。「グループ討議の回数をもっと多くしてほしい」。「もっとゆっくりと時間をかけて討議し、みんなの意見をききたかった」。「もっと討議、発表などを活発にしたかった」。「討論がにえきらない、盛り上がらない」。「自発性が足りない」。「意見の出せる雰囲気してほしい」。「先生の発言を少くして、生徒の発言を多くしたい」。「先生の主観的な意見に支配されやすい傾向があった」。「ぼくと先生とで作品のうけとめ方がずいぶんちがうと思った」。「もっと自由な解釈を！」。「文章を余り細かく切ったり、内容を短くまとめた方がよい」。「漱石の作品に時間をかけすぎたと思う」。「先生の好きな作品だからといって長い時間かけることはない」。「グループ学習はよくない。もっと現国の力がつくような方法でやるべきだ」。「あらかじめ作品を読まずにいると授業の内容が全くわからない」。「グループで話し合うのは非常にいいことだと思った。なぜなら、やはり授業中は当てられれば発言するが、自発的に意見を述べるのはむづかしい。グループだとそれも可能となり、思わぬ意味も頭の中にひらめいてくるものである」。「教科書の部分だけでなく、作品全体について、みんなで読み、考え、感じたことを出しあって授業を進めたことはいいことだ」等。

## 5. 反省と今後の問題

「こころ」および「私の個人主義」において提起されているエゴイズムや近代的自我の問題は、考えてみると実にむづかしい。生徒達の感想文をみると、彼らが現代的な感覚でこの問題を考えるときの疑問や困惑がはっきり表わされている。「先生」の背信行為を肯定する意見や、「個人主義」「自己本位」を理想論的には成り立つが現実的には不可能と割り切る意見などがかなり多い。こうした感想・意見も大事にしなが、漱石の追求し苦悩した問題の焦点に迫ってゆくように

討議などを指導すべきであったが、その点、非常に不十分であったことを反省させられる。次の機会には「それから」や「現代日本の開化」などの扱い方も実践的に検討してみたい。

前述のアンケートと同時に、読書傾向を調べてみたところ、(高二、127名)、「現在、最も関心のある作家」として、日本の作家49人、外国の作家18人の名があげられた。日本の作家49人中、35人は現在活躍中の作家である。特に、五木寛之、北杜夫、星新一などに多くの関心が集まっていた。明治の作家としては、漱石、鷗外、藤村の3人だけで、漱石は学習後ということもあったか、第3位に入っていたが、鷗外も藤村も、第20位に並ぶという状態であった。「好きな作品の傾向」としては、推理、探偵、SF小説の類に最も人気がある。

現代高校生のこうした読書傾向の実態に対して、国語教育における文学教材の扱い方をどうするかということは考えてみる必要があると思う。すでに近代文学の「古典」的存在として高校生から遠ざかりつつある明治や大正期の作品を、食わずぎらいにさせないように、意図的に現代国語の教材としてとり入れ、効果的な指導方法を工夫しなくてはならないと思う。

私はたまたま高校2年生の現代国語を大体同じ教科書(筑摩)で3年間くり返して担当したことになるが、生徒の教材に対する反応をその年ごとに調査してみた結果、3回とも、「こころ」と「山月記」とが、他の教材をひき離して、「特によかった」という評価を得ている。その第一の理由として考えられることは、この二作のいずれも、内容が人生や人間について深く考えさせるものであり、同時に、文章そのものが、構成的にも文体的にもきわめてすぐれており魅力をもつということである。そうしたすぐれた条件をもつ作品を自主教材として発掘するとともに、教科書教材を扱う場合もふくめ、作品の一部分、又は一部分の欠落した作品としてではなく、できるだけ完結した作品として鑑賞するように、教師が強力に指導しなくてはならないと思う。その場合、特に長編小説の扱い方の困難さが考えられるが、読書指導として、計画的に時間をかけて指導する必要がある。他教科との協力による指導や、効果的なグループ学習なども、すすめてみたいことである。今後こうしたことを、実践的に工夫し、推進してゆくために、上記の漱石文学指導の拙い試みを生かしたいと考える。